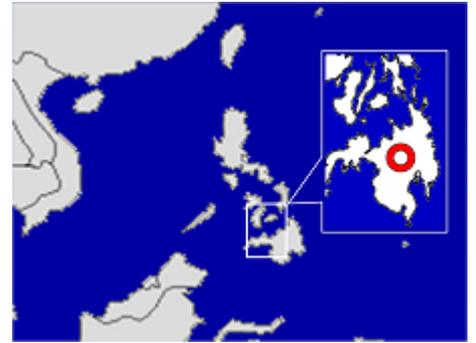


谷口末廣さん

1920(大正9)年10月19日生まれ
当時の本籍地 鳥取県
陸軍 輜重兵
第133飛行場大隊補給中隊など
最終階級 軍曹
フィリピン・ミンダナオ島



- 1942(昭和17)年1月10日 現役兵として入営、関東軍10師団輜重10連隊で満州へ
- 1944(昭和19)年6月初め 第133飛行場大隊補給中隊に転属、**ミンダナオ島に送られることになる**
- 1944(昭和19)年8月15日 ミンダナオ島北端のカガヤンへ上陸、島中央部のバレンシヤ飛行場に
- 1945(昭和20)年4月26日 飛行場を爆破し山岳戦に入る**

●車両も山中では使えないので燃やしてしまう。荷物を運んでくれていた現地民が、朝起きたら全員いなくなっていた。警備中隊中隊長は、「我々の行き先を知っているはずだ、先回りされたらやられる。追いかけて殺そう」と言ったが、これまでこれだけ協力してくれたのにと、大隊長が見逃そうと言ってくれた。後に戦犯にならずに済んだ。

やせ衰えた自分たちが山中荷物を運ぶ。食糧はない、マラリア、デング熱。召集兵がマラリアになる。「谷口班長、お母さんが迎えに来ました。お母さんが迎えに来ました」と手を握って死んだ。その後僕もマラリアになったが、彼の面倒をみていたのを知ってる兵隊たちが「班長を連れていかなあかん」と支えて連れていってくれた。

●島の真ん中に他の部隊も追われて来て、どの部隊とも分からない3~4人ずつが固まって倒れている。割に早く蛆が湧いたり白骨になったりする。毎日スコールが来るので、天幕を木と木の間に張り、休んだまま死んでいる。

死人からものを取って食べるのが楽しみになり出した。死人のポケットを探ってみる。雑嚢を持って歩いているとどこから撃たれるか分からない。倫理もなにも無くなってくる。補給中隊は、背負っているのは部隊の物だからどんなに飢えても盗ったら厳罰だが、死人のものなら構わない。死人と一緒に寝たとか、死人のものを食べたとか、死人の服を着たとか、死人の靴を貰ったとか、皆知っている。

●1945(昭和20)年6月下旬 大隊が解散

●部隊行動はもう出来ないので5~6人に分かれて自活してくれと部隊長も泣きながら解散。

大隊の非常食糧の倉庫があったが、解散翌日、僕の中隊のある曹長が兵隊を2~3人連れて襲撃し、同じ大隊の主計兵5名が乾パンの箱に頭を隠しているのを、銃剣で刺し殺した。

天幕のある所で寝たいが天幕を張る力が無いので、先に行って野垂れ死にしている所に寝る。湿っているので朝起きるとヒルがいっぱいくっついてくる。

●いざる如く進む。解散して2日目ぐらいに自爆の音を聞く。一緒にいると食糧に出くわさないの違う道を進むが、次第に顔を会わす事がなくなると寂しくなってくる。死体に遇うと日本軍がいたんだと寂しさが紛れ安心した。

蛙は叩いてポケットに入れておくと、夜には生乾きになりスルメみたい。弱い者はそれも出来ない。このままではお互いが殺し合いになると、「これからは階級は無い、家族だと思って元気な者は弱い者に分け合おう」と説いた。

●5~6人の兵が輪になって、近付くと倒れた兵隊がいて、息をしてくかしていないか分からないぐらい。その爪を剥がそうとしている。もう連れて歩けないので爪を剥がして持って歩こうとしていると言う。涙がぺろ~っと出ていた。

●顔色が良く太った兵隊たちに会う。羨ましくなって、食糧の場所を知っているなと思ひ、何を食べているのか聞いてもにた~と笑って返事をしない。臭いは肉。分けてくれと頼むと3人でコソコソ相談して、飯盒の中盒(なかごう)に肉と野草を煮たものを入れてくれた。御礼を言って食べた。何の肉か聞いたが言わない。

喉が渇き谷川に出ると、日本兵の腿が削がれて、隣にたき火の跡があった。1人が「あの野郎、仲間の肉を騙して食わせたか、ぶち殺してやる」と自力で歩けないのに銃にすがって戻ろうとしたが、返り討ちに会うからと止めた。

●もう1日頑張れ、もう1日頑張れと、騙し騙し歩いた。敗戦の前日、ジャングルの間に青い畑が見えて、近付くと芋畑。喜んで芋を掘り出してかじると、撃ってきた。日本兵。少尉と7~8人いて「この畑は俺らのものだ、無断で掘ってけしからん。早く出て行け」と言って、頼んでも食べさせてくれない。頼みに頼んで1晩泊めて食べさせて貰う事になった。朝になると皆寝たまま下痢でびしゃびしゃになっている。栄養失調で膨れ気味だった顔がぺちゃんこになり、岩に紙を貼ったよう。動けないので頼みこんでもう1泊した。

●1945(昭和20)年9月30日 投降

(取材日:2005年3月21日)